

# 日本をキリストへ 協力

# 27

「日本をキリストへ」  
伝道団体連絡協議会

〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1  
TEL 03-3296-1001

## 伝道に対する新しい提案

伝道団体連絡協議会名誉会長 本田 弘慈

「日本をキリストへ」の目標のもとに、全国の伝道団体が協力して、交わり、情報を交換し、共に祈り合うことを願って、一つになってから早十年になりました。

今日まで、毎年のように研修会を持ち、フェスティバルを開催し、地方にも出向き、熱心にピアーアルをしてきました。その功績は決して小さいとは思いません。

よくぞ、この「伝団協」を結成したものであると感謝しています。そして、毎年の実行委員会のメンバーの方と、羽鳥明委員長のご苦勞を感謝しています。

「伝団協」と略称で申していますが、一つ一つの伝道団体は、大きな犠牲を払い、熱い祈りと確実な行動をもって、日本の伝道に貢献してこられました。二十一世紀を前にして、今一つ、更に大きな有機的な結束をもってビジョンを立て、団結して前進すべきであると願うのであります。

ここにその二、三の例を申し上げます。  
電波伝道で、ラジオ・テレビが、ある県ある地域に開拓を始めようとするとき、文書伝道、トラクト伝道も協力して、その地域にトラクト配布を実施し、またその地域の教会に呼び掛けて児童伝道、クルセードなどを実施することにしてみてはいかががでしょうか。

その反対に、ある地域において、ある団体が最初にクルセードを開催しようと計画されるなら、その他の伝道団体に呼び掛けて、共に協力し、その地の教会に呼び掛け、その地域に、出来るだけ多くの伝道団体が協力して、その働きを進めることです。

今の時代は、伝道団体が個々で他の団体と競うような伝道をするのではなく、協力していくべき時代ではないでしょうか。今、日本の企業も統合したり、協力しているとき、キリスト教の伝道団体も、様々なセミナーや、方法論を語り合うだけで終始するのではなく、もっと大きなビジョンをもって大挙して前進すべきではないでしょうか。

例えば、北海道から沖縄まで幾つかの地域に分けて、今年はどこどことか、明年はまた別の地域とかにと考慮して前進されること、そして全伝道団体で可能なかぎり協力出来る団体が協力して、その地域の教会を助け、その地域にかつてなかった、強烈な、また根深いインパクトを与えるようにしてはいかががでしょうか。

「伝団協」が個々の働きではなく、協力の働きが出来るために、これらのことを心より提案します。ここに「伝団協」の真の使命があるのではないのでしょうか。

# フレンドシップラジオ

〈事務所〉〒168 東京都杉並区和泉4-22-8

☎03-3322-8955

フレンドシップラジオ(以下FR)は、一九八七年十月二十日に放送を開始しました。キリスト教の機会が非常に限られている日本において、FRは有線ラジオ放送として、二十四時間放送ができるという特権をもっています。有線には誰でも加入でき、FRだけでなく四百四十のチャンネルを楽しむことができます。放送開始当時、FRは関東エリアのみの放送でしたが、年々そのエリアが拡大され、今では北海道から沖縄までの日本全国で聴くことができるようになりました。

放送内容は、伝団協や日本メディア伝道協議会加盟団体の協力により、番組や素材の提供を受け、番組と音楽による編成がなされています。

FRの目的とビジョンは、教会に仕えつつ、未信者の方々に対する番組作りにより、人々をキリストへと導くことにあります。それと同時に、番組がクリスチャンにとっても励ましとなりチャレンジを与えるものとなるよう願っています。

今年の目標は、より質の高い番組を放送することに加えて、新しく加入される方々が起こされる事と、百万軒の有線加入者に引き続いて福音を伝えるということです。また、番組の制作提供者、スポンサーとして経済的に支えてくださる方々がさらに起こされることも切に願っております。

「祈りの課題」より多くの加入者と聴取者が与えられるように、より多くの番組が出来るように、経済的な必要が満たされるように。



# ライフ企画

〈事務所〉〒160 東京都新宿区信濃町6 いのちのことば社内

☎03-3353-9345

FAX03-3353-2658

ライフ企画は、一九八三年一月、いのちのことば社の視聴覚専門部門として発足しました。

映画製作、貸出し、ビデオソフト製作、CD・カセット製作などを手掛け、映像ソフトは百五十種ほど、CDやカセットなどは五十種ほどの作品を扱っています。

そして、いのちのことば社の一部門として福音的聖書信仰／超教派的立場／伝道のビジョン／神のみこころに従順であること、という四つの基準によって活動しています。

今、地域教会とクリスチャンが、何を求め何を必要としているのか、また一般社会はどういう状況で動いているのかを常に把握しながら視聴覚でなければ伝えることが出来ない題材(テーマ)を通して如何に効果的に福音を伝えることができるのかを数名のスタッフと心がけ祈りつつ励んでいます。お祈りください。

「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものをつくりなさい」ヘブル八・五

△本年の主な作品▽ビデオ「マルチン・ルター」「砂嵐の中から」、カセット「レジーナ・マリアライブ コレクション」。レジーナ・マリアさんの新作CDをこの秋にリリースすべく準備中です。



# お茶の水クリスチャン・センター

〈事務所〉〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1-1

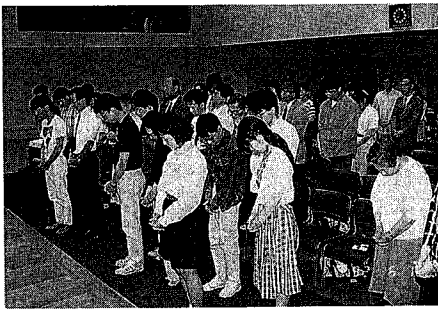
☎03-3296-1001

古くから学生の街として親しまれ続けて来た御茶ノ水、そしてここ数年、近代的な高層ビルの進出に象徴されるように、ビジネスマンやOLが行き交う御茶ノ水の街。そんな新旧の歴史が交差する御茶ノ水の真ん中にお茶の水クリスチャン・センター(OCC)は位置しています。

創立者のアイリーン・ウェブスター・スミス女史の「次代を担う学生に福音を」との宣教のスピリットが四十五年を経た今も受け継がれて、現代に至って、街行くすべての人を対象とした様々な伝道の働きが進められています。毎週金曜日の夜に持たれる伝道集会(フライデー・ナイト)は、OCCで最も大切な伝道の機会として用いられております。また一九七三年より始められた語学教室(英語・ドイツ語・フランス語)を通して外国人宣教師の先生方により、聖書からメッセージが確実に生徒さんに届けられています。

そして、三年前よりOCCの教育部門として、お茶の水聖書学院(OBI)が開講され、福音諸教会の多大なご理解とご協力をいただき、主に信徒を対象としたクラス編成により、各々の教会に仕える働き人を養成しています。

OCCは、二十一世紀に向け「主と教会に仕える」というOCCの使命に立ち、福音諸教会及び諸団体のセンターとしての役割を担って行きたいと願わされています。



# 日本聖書刊行会

〈事務所〉〒101 東京都千代田区神田駿河台2-1-1 OCC内

☎03-3291-2595

FAX 03-3233-0705

聖書は「誤りなき神のことば」であるという信仰の立場から、今の時代の人々のために、正確にわかりやすく翻訳された「新改訳聖書」の出版・頒布を目的とし、今日まで聖書事業を進めてきました。一九六二年より翻訳開始一九六五年十一月に新約聖書、一九七〇年六月に旧約聖書が完成。これに先立ち一九六五年に日本聖書刊行会が設立されました。創立以来、全国の教団・教派の教会のご協力を得、来る三十周年には一千万冊頒布の目標が達成される予定です。

特筆すべきことは、今年の四月、聖書信仰に立つ日本の教会を基盤とした聖書事業の性格をより明確にする新理事会が発足したことです。従来理事は任意的に委嘱されてきましたが、今回の新組織では、理事は各教団・教派から推薦を受けて就任するという、積極的な意味を持って成り立っています。

今後の聖書事業として①現在の「新改訳聖書」を引き続き出版頒布する②諸教団・諸教会と緊密な関係を保ち、聖書が正しく有効に利用されるようにする③聖書は誤りなき神のことばであると信じる聖書信仰に立つ学者により翻訳、編集をする 他などを基本としています。新改訳聖書が出版三十年を迎えようとしている今、この間の日本語の変化に対応し最近の聖書学の成果を反映する新しい翻訳が各方面から期待されていますが、このことから今回の組織改革は「歴史的」とさえ評価されています。



# 「教会から教会へ」と「パラチャーチ考」

否定できないが、本来の意図によって受けとめて欲しい。  
なぜパラチャーチは、教会の働きなのか。それは、

伝団協主催の研修会が、五月二十九日から三十一日に恵みシャレー軽井沢で開かれました。聖書宣教会会長の舟喜信先生を講師に迎え、表題にかかげたテーマのもとに、内容の濃い研修がもたれました。以下講演要旨。(文責・片岡伸光)

## 求められる日本らしい協力のモデル

これまでの「パラチャーチ考」をめぐる論議は摂理的なものであり、これからのよりよい協力のために明確に理解され整理される必要がある。今年はじめにもたれた、ミッシェン94はビリー・グラハム伝道チームを招いたが、「教会から出て、教会に帰る」という姿勢で実行された。これは、それ以前の同様の集会において、教会の主體的関わりが必ずしも十分ではなかったという反省に立つものであった。JEA再編のころ議論されたこと―パラチャーチの働きは、本来的に教会が担うべきわざである―や、塩原宣言の精神―宣教の主な担い手は地域教会である―がその背景にはある。特定の個人や伝道団体がイニシヤティブをとったとしても、それに教会が協力すれば、実質的にはほとんど変わらないのかもしれない。それでも、教会の本来的自覚のために「教会から出て、教会に帰る」は必要な精神であると思う。この表現は、受け取り方によっては排他的に聞こえる可能性を

は、パラチャーチが宣教の働きをするからである。宣教は、教会自体にその自覚のあるなしにかかわらず、本来的に教会の働きである。しかし、すべての宣教の働きが教会の管理のもとにおかれるわけではない。一つの教会では関わりきれない働きや、一つの群れで関わるものが望ましくない働きもある。これからは、宣教における、実際的で全体的な状況把握がますます必要になると思う。

だから、パラチャーチは、教会協力により進められるはずの働きなのである。それはまた、教会協力を生み出す働きである。パラチャーチは、戦後間もなくの、まだ日本の教会に力がなかったころに、個人のビジョンや先進国の問題意識から始まったものが少なくないが、育ってきた教会との関係で位置づけを見直し、トータルなありかたを再考する作業が必要とされるのではないか。

一方、教会もまた、関わりのないまま働きが続けられるうちに、パラチャーチと親しみを感ずつつも、その働きが自分たちの責任とは受けとめないままできた。パラチャーチの働きを、教会の本質、使命、方法とどのように関連づけられるのかが問われねばならない。これは従来の教会が論じる教会論からはみ出している部分で、これからの掘り下げを必要としている。地域教会と普遍的教会との接点を自覚し、キリストの体としての全体

の働きという視点をもつことが必要である。地上の教会と天上の教会を切り離すのは、決定的間違いである。主は、ピリポ・カイザリアのペテロの告白の上に教会をたてると言われたからである。信仰をもつとき、私たちは教会の一員とされている。意識的に加わるものでありながら、天的選びがそこにはある。ふつうの人間が集められ、人々との関わりの中で扱われ変えられていく。和解の福音をいただいたものは、人と関わり和解の実を結ぶのであり、それが人と協力する土台である。だから、キリストの教会の一致が、目に見える形で、できる限り表現されることが求められる。その中の、どこにパラチャーチの働きが入るのか。それは、余裕ができたら関わりとういうようなものではないはずである。やはり、キリストの体全体の働きという視点から出発すべきである。

日本は、神から目をそらせる力の非常に強く働いている国である。その中で福音宣教の戦いを進めるために、日本らしい協力のモデルが求められるし、またある意味でその試みはすでに始まっているといえるのではないか。パラチャーチは、教会の活動の腕としての役割を担うものである。

講演の合間には、賛美と祈りによる礼拝のときがもたれました。宣教のフロントで闘っている牧師・伝道師のために、また伝団協の仲間のためにとりなしの祈りがささげられました。

発行日 一九九四年六月二十日  
発行者 本田 弘 慈  
編集者 鈴木 繁